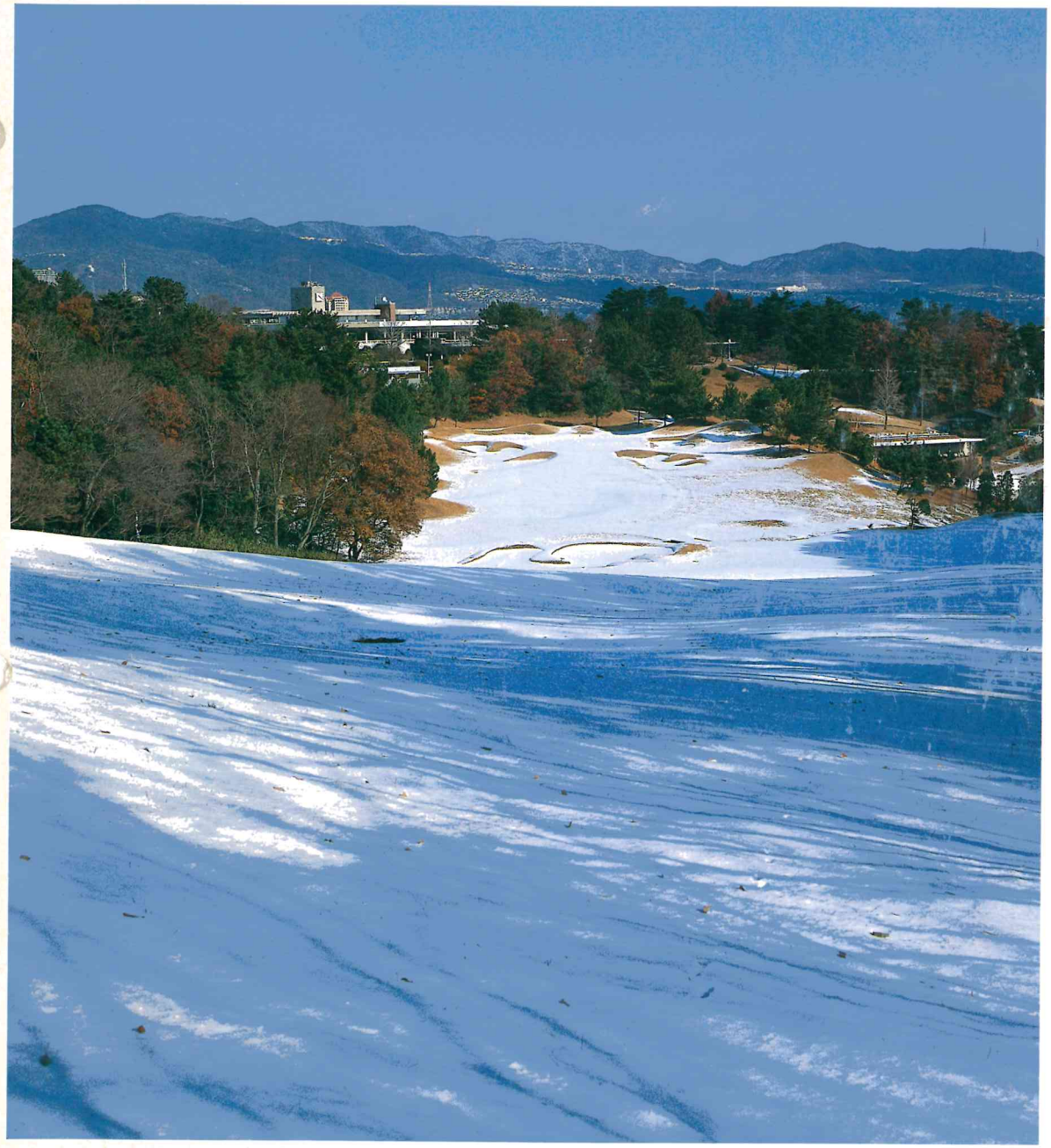
VOL.53 NO.599
2006年1月

SINCE 1926

TAKARAZUKA
GOLFERS



禅ゴルフ

長尾　和宏
（昭和33年6月30日生）

今年48歳になる。ちょっと練習すればすぐシングルや、と冷やかされて、はや10年がたつ。HCは10が最高で、現在12。仕事にかまけて練習場に行ってないので、今のハンディは当然か。しかし、もう一皮むけたい。

宝塚GCは樹木も素晴らしいが、樹木の間に見え隠れする阪神間の景観も絶品だ。特に旧コース17番や新コース9番ティの眺めが好きだ。新コース18番ティからは自分が小さい頃から慣れ親しんだ中山寺や清荒神が見えるが、これらは密教寺院でもある。密教と言えば、甲山に向かってティショットする新コース5番にくると、必ず空海の顔を連想する。甲山の南斜面にある神呪寺は、空海の恋人が祭られている。丹後から皇室に嫁入りするも、訳あって逃げ出し、甲山の南斜面に隠居した若き女性を、空海が面倒をみている。この不遇の女性を祭ったのが神呪寺である。超人的な活躍をした空海の生涯の中で、唯一男性を感じさせる話だ。おそらく空海の精神的恋人であったのだろう。

私は、18歳までは、その甲山を東から眺めて暮らし、現在は南から眺めて暮らしている。そしてゴルフ場への往き帰りでは、甲山を西から眺め、新コース5番ティでは、北側から至近距離で眺めている。そういう自分の縁を不思議に思う時がある。宝塚GCや密教との縁に思いを馳せるなんて、自分も少しは歳をとったのか。

以前、本誌に杉本理事長の書かれた文章の中で、「餓鬼のように球を打っていた」という表現が大変記憶に残っている。仏教では餓鬼とは欲望に捉われた状態であり、決して良い状態ではない。しかし、凡人が自分の実力をも省みず何が何でも貪欲にスコアを追っている時は、確かに餓鬼という言葉がふさわしい。またゴルフをしていてそう楽しくない時もあり、それでもゴルフをしている自分を、まるで仏教の修行をしていると感じることもある。つまり、凡人にとってゴルフとは、餓鬼であったり行であることが普通であろう。

一方、ゾーンに入るという言葉があるが、確かに年に1～2回位、やることなすことが勝手に上手くいくというラウンドがある。後で考えると、無欲、自然体でゴルフに臨んだ時に起こる不思議な現象だ。これは仏教でいう、空の状態ではないかと理解していた。すると空の状態でゴルフをすればいいんだな、もしかしたらゴルフと仏教は関係が深いかもしれないなと想像していた。

実は、ジョセフ・ペアレントという心理学者かつPGAツアーインストラクターが、昨年「禅ゴルフ」（ベースボールマガジン社）という本を書いている。この本を見た瞬間、「外人に先を越された」と感じた。「メンタル強化の切り札が禅だ」と堂々と本の帯に書かれている。ビジェイシンが強くなったのは、ジョセフの禅を利用した指導のおかげであり、この本をキャディバッグに入れていつも持ち歩いているそうだ。

自分の怠慢を、禅でカバーしようということでは虫が良すぎるので、少しでも空の境地でゴルフを楽しめればというのが、今年の抱負です。宜しくお願いします。